

平成 24 年 1 月 4 日

電通新年仕事始式で石井社長があいさつ
—自らのイノベーションに挑戦する—

株式会社電通（石井直社長）の平成 24 年新年仕事始式が、1 月 4 日午前 9 時 50 分から東京本社などで開催された。東京本社の仕事始式は汐留本社ビル 1 階電通ホールで行われ、石井社長が年頭の所信を述べた。要旨は以下のとおり。

◇

2011 年は、東日本大震災をはじめとして、世界が様々な試練に直面した一年であった。一つの時代の区切りや節目を感じさせる出来事が多く、世界が大きな転換点を迎えた一年として、人々の記憶に残る年となったと感じている。

私たちも数々の試練に直面したが、その一方で、電通グループのグローバルネットワークが持つポテンシャルを実感することができた一年だった。顧客の課題解決において、国や企業の垣根を越えたシナジーや成果も生まれ、昨年 12 月には、電通マクギャリーボウエンが米広告専門誌「アドウィーク」の「AGENCY OF THE YEAR」（米国部門）に輝く、という大変うれしいニュースもアメリカからもたらされた。

あらためて、電通グループはグローバルを舞台としたビジネスの中に身を置いている、ということを強く実感した一年となった。

2012 年は、電通グループが 10 年後に成長を遂げているかどうかを左右する、重要な分岐点になると考えている。新しい一年に当たり、「アイデンティティ」と「イノベーション」という二つのキーワードを強く意識したい。

電通グループのアイデンティティの基盤は、全力で仕事に取り組む姿勢や徹底したプロフェッショナリズムであり、それこそが電通人の DNA に他ならない。2 万人を超える電通グループ社員の一人一人がプロフェッショナルとして、個々の仕事に全力を尽くすことができれば、電通グループは一つの大きなチームとして、顧客に対して比類なき価値を提供し続けることができるはずである。

一方、イノベーションの実現において最も重要となる要素は、何よりも強固な意志、すなわち変わる覚悟である。本来、イノベーションとは非連続なものであり、従来の延長線上にある発想や施策だけでは、その実現は難しい。そのため、電通グループ、特にその中核を担う電通という企業自身が、過去の成功体験や固定観念を打破する必要がある。

さらには、今後電通グループは、顧客に対して提供する価値をより大きなものとしつつ、既存の収益基盤の強化と、新たな収益基盤の確立という二つの大きな挑戦を同時に達成する必要がある。これは私たちのビジネス構造自体のイノベーションに他ならない。従来の広告ビジネスとは異なる収益モデルの確立にも、顧客のパートナーとして正面から取り組まなければならない。

日本の今を象徴するキーワードとして、「絆」という言葉が挙げられるが、「絆」を生み出す力はコミュニケーションにある。コミュニケーションを通じて人と人の結び付きを強めることを使命としてきた電通グループに求められる役割は、今年一段と大きなものになると感じている。